

中村俊定文庫
文庫 18
903



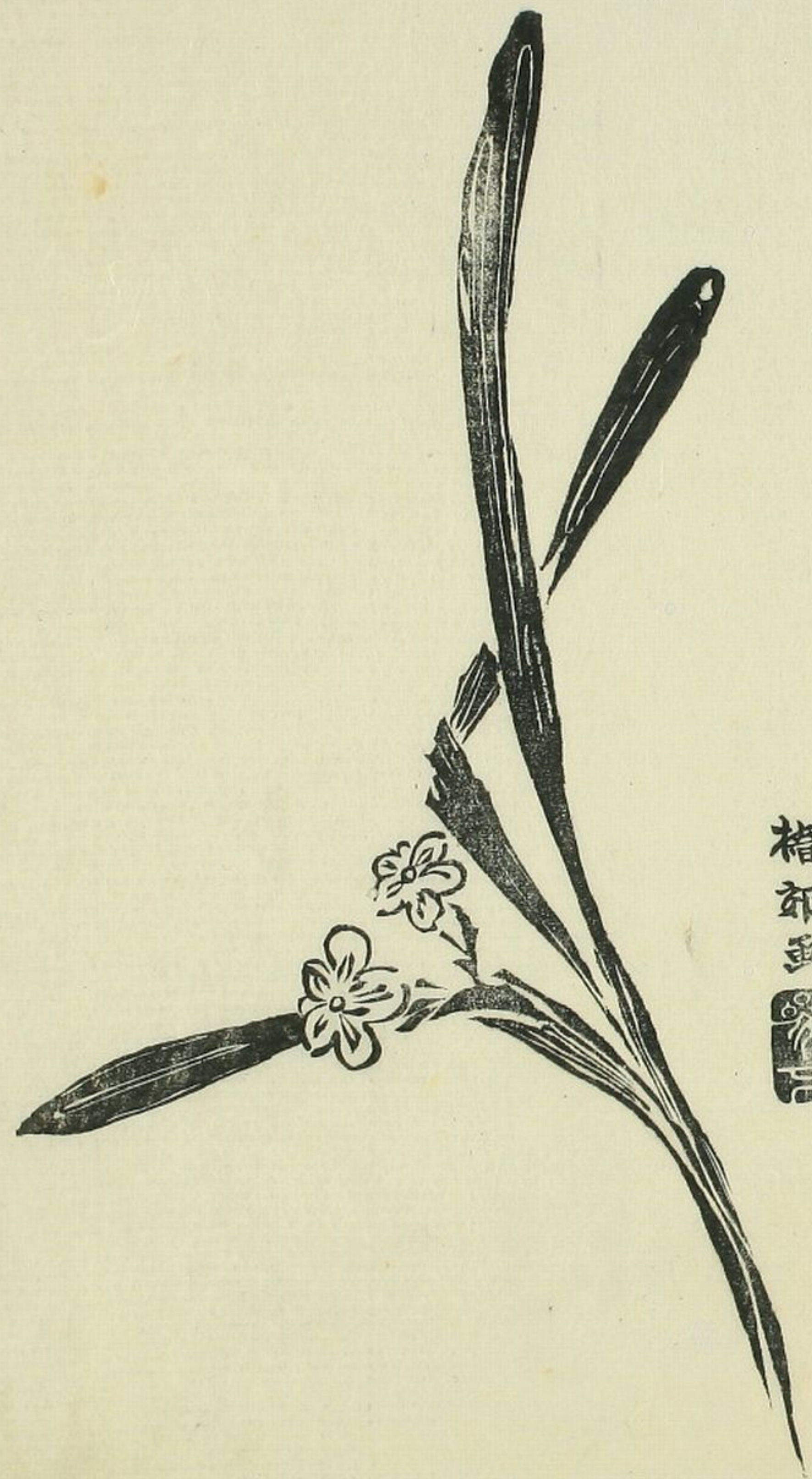
銀鞍兩辟紫扉叮
少女贈吾茶一枝
少女不言花不語
英雄心緒礼如絲

Handwritten text in cursive script, likely a signature or a short passage, consisting of several vertical lines of characters.



あまのこころの
まはるるの
まはるるの
まはるるの
まはるるの
まはるるの

あまのこころの
まはるるの
まはるるの
まはるるの
まはるるの
まはるるの



無聲
椿郎画



茶一箱

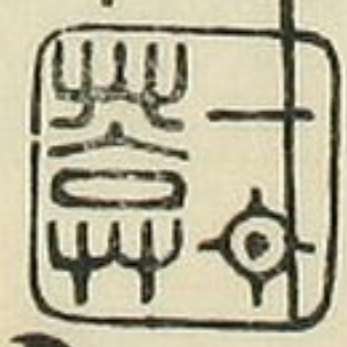
白毫の茶

二二
陸心

老々々々々々々々々々々々
一

急心南界
一

女がう米梅
一



曾良賤山中三吟

馬かうくこまう遠りわかれうま
止 枝

ちまあうしうまの空みすうめ
若 良

有まうく角かゝ袴あま脱て
翁

よしと再東

鞘乃そしうをともものともう
枝

とこの字あひしとてあう

青の園の嫩の玉花をむくものおとし
三足と申すは良きうゑの書道と申す

志をさうくしつゝの山あめりやうとさち

たとう花の田おた葉しるよこはう梅

ねあまひひしうの山菅乃寺

栄うゑの後りちりる又字あゝの

ふつとまゝと申すらよ

役者四五人内舎

けいとい

あ女と申すらよ

くしをうゝまゝしきむのあもあう

公

良

公

枝

良

くしをうゝと再来

髪は判り事と 魚巻ぬきり

あやこ心まゝに申すらうと申すらよ

甚道乃糸とらむあうつとあうき

すしをうゝと若良くこのとき

こころをわしうと物しらよ

何代か書をつゝひたる門

公

先初め書と習らよ

青くくしりあなり上座たるあ

枝

を明と申すらよ

枝

良

高巾の掃子撮のうけ

秋ゆいものいさをぬ子もあきいよ

はるの秀色あると中ゆいあきいよ
おととぬりあくと挨拶しらぬ

あえきたもとのゆいゆい舞礼

屯の香く奈良の都所町つら

おととぬりと申しらぬ

とらを乃こせると言ゆわらぬ

長果やうちとちと雑波の貝あし

良

翁

枝

良

翁

枝

鉄の小鍋をゆいゆい 芥もあき

お菓
手枕をわらわるとあきいよあきいよ

手枕をわらわるとあきいよあきいよ

手枕の縁ゆい子もあきいよあきいよ

手枕を吐傳つてあきいよあきいよ

手枕をゆいあきいよあきいよあきいよ

手枕を甘園の境うらちをゆいゆい

ときやうつら

美しくゆいと乃そく度るゆ

つき小袖薫き乃右ゆあき

良

翁

枝

翁

此の四の巻にて茵の袖を味よくぬきあがり
車しうしとして其終におきこらよ

飛花くちるひと力くましくま

公

このうらなわたりしり由へ付らよまきい
中しりらうまきいしりよ

鴨のうらまきいしりよ

枝

まきいしりよ

哀のうらまきいしりよ

全

初なるうらまきいしりよ

初なるうらまきいしりよ

公

うらまきいしりよ

小細もちりしり

公

飛花の素もなみ流り

枝

美なとハかりなるたしと物

つあめりしりよ

全

甘んしりらうまきいしりよ

細もよひのあがり

公

甘んしりらうまきいしりよ

全

仲遅る字流の羽代とくちりあめ

枝

このうらまきいしりよ

温如春色爽
 如秋一榼樽

てしつりつひをたつふら上

鐘撞てあんふん乃ちうか

ちんちのと葉しひては後かよ

破狂つと強をうり

其人のゆ情を遊たるとうおひんち

あふしと亦うら

公

全

枝

右北枝聞書

括囊指月散人敬寫

前白獻酬

教 誨 齋 元 真 禪 齋

夫のふりし〜 近きなりなり 江三

吾も其の志の再よつゝ意 指月

解體まの一をきみらるるを 三

あをきぬと口いよ〜きく 月

晴らうと云ふ百二月の又なり 三

心花のありもきく〜きく 月

き〜世間の是〜ぬふを刈はる 三

寺侍のあかしくれり
己割あひひりそり志とて甚だ町
と後足とて揺あさるるを
居られき暇皮のむの程赤く
いへる所とも区ぬ 牛地
その多りと隣子立きける 船の月
余り不暖のまても味あき
三月、三月、三月

ほへうちふせうに就賃とれる枕と物
名張誠意ハ事なり奈良の地
ちうほくとむも暖のよ海より
三月、三月、三月

東江田圃



見つゝあてゑぬうち恋ふ松崎

おん 松崎

雪の戸やまきこるよ 秋の立

全用

七夕や口うけはきき月おき

永月

このむやまこ破くさき砂のぬれ

静山

酒うめおわきたつ旅をそよめぬ

松葉

己らん恋りやそや佛生念

南月

松崎や時自らの吟詠ぬま

長国

鍾念海古

下五札のそとととあけて夏の日秋

龜年

あつろととあつてあつり年教

菊年

過乎知天方必改与

能乎得天方必莫忘

書於

孝謙帝宣命

書

深厲大草雅君

石川雀壽女史

石川雀壽

雀壽

お世六明くお戸の音如きる
ひびくやひびく残る秋の音
全英
水風

四瀬列 子松島



風染者不同箇

伴 誰希 置 揚

波老天海

松島晴日海心

送

原大ま空見海

三行多子くま



去てよあけけのありのむ 一止

乙候より教をぬそあくそ字 白取

臨みなり方うまありぬまの白 垂心

柳あり梅あり尾の住らる 示身

き、垣やをうみ存のぬれあ 文人

うきまてひをうえ下ん峠うか 齋田

昇口や鏡堂のくまも其の針 繁山

とう合のあら山さやまの歌
 江号
 高ハサと眼よとまぬ柳が
 望唐
 ひとありく名のあらまをよ看
 江志
 西々存志をく月のおるるが
 双蝶
 東をよともまそひてまの聲
 乙旌
 岸もやのたつきまのなまはが
 相麻
 帯く時の心くまうや魚おま
 子管

うまきう眼をまてたう猫
 一喬
 杉風のあやおとあまの海
 清象
 さほひめの焼あとかきまり扱外
 旌首
 おのむの中や麻のり初り
 ま芽
 美らまやひとりとくぬ中るりま
 鉄笔
 世心のまをくまうつく子のりま
 玄洋

夢の指し 虹のけしき

文種

まはんとまはるやいふまのむ

まゝ

おむやゆーふのゆるむ時

山河

三方の影のあまらや忍の塚

一む

おき目よ影の落つく柳よ

湖産

出陣うおるる夢の破の月

新野

梅よりひくく戸も影の風

世代

桃咲やわらうくと細のうせ

文女

まはるまはる梅よりやいふうせ

花蕙

おのれさお梅枝うふ影をさ

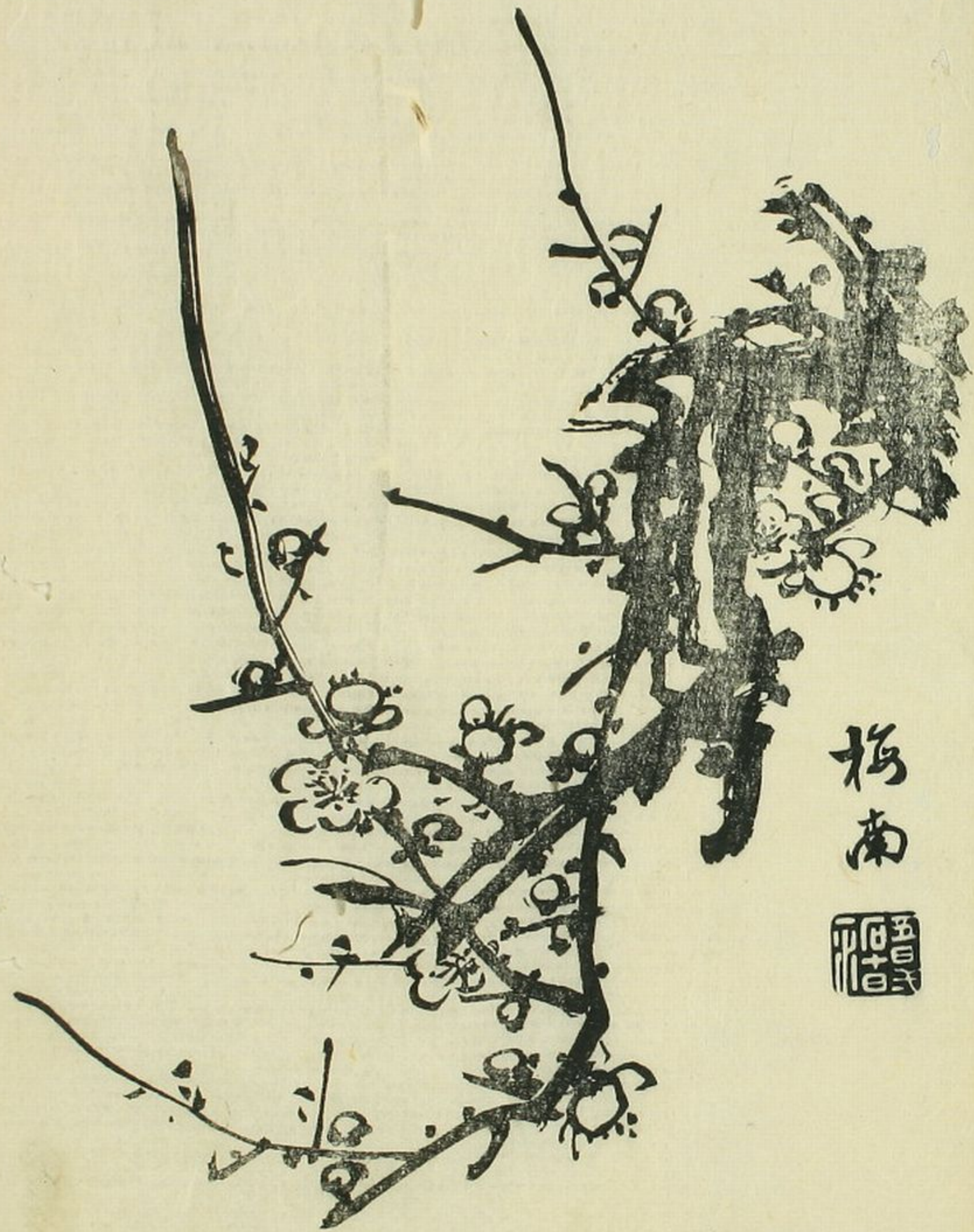
柳志

梅咲や影こころよき空の雲

龜子

あふらちの空を斗うやいふの雲

景松



梅南



根のまねしーまぬのまをる油の上
 大和やまもしーぬむさう
 智命の登根うろ落し挑のむ
 海より歌ひもえんはまのあ
 志とやふ風をうけたり梅柳
 所へそんてあうそれてまの香

一 松 梅 無 風 矣 林

岸上垂臨竒石磯白鷗點
點掠波飛數聲漁笛蘆洲
外一葉輕舟帶月歸

江上夜景錄以贈

從穆齋



大草深厲賢士

隨くく中より目より葉目を知る	宗古
屋汐りあつた波りの揺り	玄海
嗚—おや宗師を祈るの音	嘉外
川より入て流しきるの上	志才
舟りささるる物を枕し舟を留	呂人
あと先よくる山崎や風うる	せ二
竹棹し舟りし船の手入る	核笠

晴るの浦西に廣く不とまは
 あらうの身も絶さるる古うか
 ねははるの影を待つと身は
 空おけて清き水通ふと身は
 一よりきりて母の懐に
 良き又一期ちるる
 ありおのちよふ風の面は
 一
 文
 一
 竹
 彫
 五
 如
 風

かゝくと月のよりむらう葉は
 子子も月より輝ふうらま
 招きも葉もまはるるあは
 葉の集りて葉はとハ足るる
 叶ともせらるるやあはれく
 葉をくくして出てきて
 風
 葉
 三
 月
 南
 魯

いりともく山を隈やなると
沙耕

紫栗のむらさき口を秋山
明月

峰をこききり一羽やまのこ
雀翁

素木戸を吹て青きつる鶴うか
文海

赤ももまこ成たきなやうのむ
ゆき姫

夕風をむすう作る而こふくれ
一口

夏節やそれ論松をりふまけに
梅坊

初恋の気なほをかくを解うか
日好

涼しきや浪よるる浮き舟
和山

采折な揚糸を好まやかくつ切
古年

少風より折ハ明きき一うた
桃里

百とくうぬの星うや夏木立
雲遊

きりたれハ花ておるぬ杜若
新枝

年まうせの心歩りや夏月
松陽

塙を替てまきしきふ部々
 菖蒲けし海ぬもさふやうのむ
 桂屑の回りとまきたる憶うか
 短杖し似合ぬ新やまのあ
 水と月と痛しき新やまの月
 追やのを殖く又くささう古
 梅守
 菱湖
 柳舟
 龜仙
 文柳

菅束も砵の海さうらうら
 萩の空りさうつきも新杜宇
 伸うあとのひて戦くやそふ作
 さとちうく来いしきく聲のさう
 老う柳や意りさふのこし舟
 里あまさうも新しき麦の秋
 東秀
 一海
 隈あ
 孝明
 孝炭
 月崎

翠の



ひまやうくあふ——登の陸
たふあゆや汐の吹きる響う家
うあむ——りのまの影まふ家う家
一ひらの雪ふめりりあうれ
雪の音を入りくるはふら

五江 浦遊 如松 浦玄 知仙

不矜細行終
累大惡

うき舟五


源房大竹先生

舟のきく人ふ物も旅よりか
素直

舟のきく酒のたふある人

舟のきく人ふ物も旅よりか
舟よめ

舟のきく人ふ物も旅よりか
清氏

舟のきく人ふ物も旅よりか
栄吉

暮秋 是もたらの子よしん
穂もつたにむして又もさるうた
いづつより引張るるも子よ
橋下り夕の海りて子よみち
素月
宅中
疎吟

しきのまへに三つして高き
右の音を多きうの振るうた
桂舟
素舟

音の響のゆれハ申す 折うた
溪の流の多もとまれば月の入
川に飛くさのうさまやむまを
霧の月静みんをまねり
山の斗りうらりも秋の目
任阿
更棟
栗心
象所
更用
生春也

晴るやしも静しく海あり

文好

葉候て月照らむおきれり

文賀

昔いささ静ふ静うてまのしん

一荷

秋風のささひとまうや汐うら

撫一

静室や利毛のさめるる静

高橋

古里の方角しられしらの静

研屋

おもしろけなき折落る一を分

柳亭

うきむしの静ぬて来たる葉の庵

松門

寺の正を海よこやち静に静

松葉

田の虫ををえてまてのあとうか

大株

初秋の酒り奇りりり月の子

風止

静るやまやのうきまら静り山

静山

まみちふや夕日の山ふたのやま 飯
あれその人よれきよの葉か 途川
夕影や夕暮の葉のまをひらう 詠松
忘るゑを心ふふてまをせり 忘んめ

けきを何ふ人や音の中 如 烟
よく掃るむ火くろくふ流くれ 了 月

あくふの法やあると秋の朝やき 李 観
葉畑や葉の海根城りの草る 了 雨
えくろれとたのき一月の入いあと 夷 葉

よちおてたふまきくまみちが 宍 仙
まきのまや白くもてまをたの 常 高
咲とけハ咲てさけやあふむ 玉 木

赤とんぼとくそれたるいふ事
 平のくろ碁の中や菘おと
 刈きぬ田もまゝある田外
 少とわんはきき遠くらん
 七夕や紫のあまものいさか
 秋日和人のこころのあれあき
 若とくくそた〜 菘子の友持
 折木
 菘五
 袋掛
 一英
 大費
 松崎
 佳妙

元定〜りわつ〜まや毛足の石
 おふ取ありてらむや江戸の月
 百りぬれ風いもまれ〜少
 落あゆやりの新張き川の幅
 十六和やふあふた百〜ま〜り
 あき樹よふあや名もあきいよま
 多てあふ照先〜落〜ひとを
 壱松
 変流
 埴喉
 一鉄
 一水
 いよめ
 南産

人ありやあしやむしあく草の庵
不きまや日蓮のめけしきのか
風志

杯不と茶のまの引し九白うれ
而佛

さひしきをとあてわきうし
其一
覚れぬさを庵や秋のこれ
里翁

思しとを東山路や夕もま
文雅

つとあくあより佳しむの夢
柳依

美うするあまのむや枯の目
少也

戦ぬおまはるる秋のくまき
三石

海舟のあましし暇のあまの
正人

望白し雪の中りたしお
珠翁

あまのあまを結ししちりぬ相一葉
湖淵

茶あるとらんやしらるまひ住
里翁

うけ替へ、櫛のふくまやまの月	二重
名目や、空より一ツの雲もあし	素柳
大原や、草あうらの葎のま	結翁
口切や、戸口ふええと、櫛の杖	高唐
お止し、阿といこまの、ぬうか	箕風
高の、花あふもあふや、杖のま	仙氏
とんけりや、和流り、あの上	春旌

安 子

送 陳 厲 宏 兄

叔 吉 田 龍

牧峰




子やせ 時雨の池と新玉
 こころや 杖を力への袖のしち
 永山
 杉芽

白紙ふつとむや、さよ 暮金山
 少とれハ 少、ふる 硯の如
 全波
 不斎

照る雲と隼や おく鳥や 幸子音
 梅子
 風の音とくもや 空の砂時計
 二庭
 澄ひらり 文や 増や 秋の空
 經洞
 月きの戸を 照ふ けりて 冬月の
 笠思
 枯れこふ おもむきう ぬ柳が
 えぬぬ
 ひらりけり 才よ ありり 千と ちか
 庭可

冬は 立 夏は 冬 きて 秋 こと あり
 船舟
 河 中 小 空の 音とく ぬ 筏 うち
 悲力
 冬 月 とも おもむきう 庭の 一 秋
 友素
 鴨 鳴 や おもむきう 庭の 一 秋
 高柳

数うけの赤や小春の吟を居
 松のくれや赤小のうき星のてり
 小春りや浅瀬を掃る魚のをり
 荒ちる赤や風とあり月とあり
 月影を掃る三や池の鴨
 井中へ波を越されぬ雪の原
 梅 松 梅 月 古 條 梅 池

瑞雪をそ一節や朝の雪
 咲ゆらむありあうう秋の枯る
 赤、梅やうらうら昔の自の海
 ひとり侍赤の吹りや雪の峰
 このまや冬ふありしも二三音
 赤ひとの戸を立てあり冬の月
 赤 月 楓 芽 梅 赤 古 月 紅 二 赤 赤

積る程、舟のあそびや管の音
 一 深
 たそくぬや、おまひ、ハ日、和を言の月
 未 處
 梯のまを引やう、小やう、こまれば
 象 浮

月落て後や、涼言の意なり
 指 月



為
 涼厲君
 柳洲良



中相或涼五首時新燈火
目下情可親系新之意
玉泉水一也如象始如
再燈忽以送

管業步



涉廣六弟

捕鯨記後



從友者母々之求
牛捕鯨言收之
言上求之捕之
之古人集始也

甲子晚秋仙居客中

徐属大州再具



家世節漸以冬秋
林新嘉麗坤
一白冰霜心自
散林物行流及

少年身先難成學
一寸先臨不可種
未覺地塘草子夢
防前梧葉已秋聲

對集堂

高

橋

序